

「テクノロジーとともに拓く未来」/社員ボランティアが築く「社会的エコシステム」

テクノロジーは、未来を切り開くためのツールである。そしてそのツールは、手を伸ばせば届く距離にある。テクノロジーを使って、未来を描き始めよう――。

モノのインターネット (IoT) や人工知能 (AI) に代表される、第 4 次産業革命。テクノロジーが社会の根幹を担う度合いが増していく中、社会のあらゆる部分は、テクノロジーが関わっている。一部の専門職だけに任せておけば社会が機能する時代は、過去のものとなりつつある。

にもかかわらず、一方では、テクノロジーへのアクセスが限られた人たちがまだたくさんいる。例えば、IT スキルを身につける機会がなく、就業機会を逃してしまう若者や、インフラが十分でない地域に住んでいる人のほか、貧困のために IT ツールアクセスする機会がきわめて限られている場合。また、障害のある人たちにとっては、障害の度合いに応じたアクセシビリティの工夫も必要だ。

IT が文字通り社会に広く行き渡るということは、人々の生活を良くすることにつながるが、現在の世界はまだその途上にある。つまり、IT を真の意味でより多くの人のもとに届けることは、極めて社会性の高い使命を帯びている。マイクロソフト社プレジデントのブラッド・スミスはこのことについて、「マイクロソフト自身が、より多くのことを達成しなければならない」と話している。

こうした考えのもと、マイクロソフトが社会に提供しているのが同社の人材と、非営利団体 (NPO) への支援だ。NPO に対して同社ツールなどを提供すると共に、技術人材として社員ボランティアを派遣している。

■将来のテクノロジーを支える「仲間たち」に出会う

例えば、プログラミングが 2020 年から必修化される教育現場へ。プログラミング教育の導入にあたっては、指導担当教員のスキルアップを含む教職員全般の IT スキルの向上など、すべきことはたくさんある。また、非営利団体 (NPO) に対しては、入手可能な IT ツールの効果的な活用方法や、支援者である団体職員へのトレーニングなど。社会がテクノロジーを効果的に取り入れ発展するために、「技術人材」として伝授できる経験や知識は少なくない。こうした取り組みを、同社はフィランソロピーの柱の一つとして位置付けている。

日本マイクロソフトの松原由佳さんも、こうした活動に積極的に参加する一人だ。2015年に新卒として入社し、4年目。社員ボランティアの一人として、小学校などで実施されているプログラミング授業に出向き、児童・生徒向けプログラミング教材を活用した出前授業を行っている。

「みんなと一緒に挑戦したいので、やり方が分からなくても一人で悩まないで声をかけてね。早く終わった人は、周りの人に教えてあげてね」

松原さんの元気な声が、小学校6年生の教室に響き渡る。小中学生向けのプログラミング教材は、児童が興味を持って取り組めるようデザインされている反面、没頭してしまう子どももいる。一人で悩まずに、また、周りの人を助ける、というメッセージも、単なる声かけではなく、プログラミングで見落とされがちな基本要素だ。児童らは、松原さんほか9人の同社ボランティアの助けを借りながら、作業を続けていった。

出前授業で使用されたプログラミング入門教材は、「ひつじ」や「ゾンビ」を動かし、宝石や野菜を落としたり拾ったりさせて、それぞれの行動には音をつけられる。児童らがそんな時にプログラミングする落とし物は「ダイヤモンド」で、音は「うめき声」。わざと意味不明の行動をプログラミングさせ、おもしろがっている。子どもらしい発想と言えばそれまでだが、松原さんにとっては、児童らの自由な発想に触れられることも新鮮な経験だという。

松原さんは、大学で農業情報学を学んだ。研究テーマは、ITを効率的な農業経営に生かす方法。膨大なデータを集め、これによって何ができるのか、そして何ができないのかを知る必要があると考えたことがきっかけで、プログラミングを学ぶようになったという。

テクノロジーについて時代の要請が高まっている中、「子どもたちにも興味を持ってもらい、将来の選択肢を広げてもらいたい」との思いから、ボランティアとして参加している。子どもたちの自由な発想に触れる時、子どもたちにもっとたくさん教えたと感じる。「みんな、自由な遊び心に満ちているなあと感じます。もっと、『こんな風にやりたい、表現したい』と子どもたちが感じるままに、何かをできるようになれるお手伝いをしたいと思っています」

■NPO も大事なパートナー

IT というツールをいかにして社会に浸透させ、人間の暮らしの幸福に資することができるといふ上では、社会の課題解決に取り組む非営利団体（NPO）との連携も欠かせない。

街づくりや学習支援など、日本マイクロソフトは社員ボランティアの派遣や、IT ツールの提供などでパートナー関係を築いている。NPO は地域社会や教育現場とのつながりも深く、「NPO が社会に構造的なインパクトを与える活動を、協働を通じて持続的に支えていきたい」と、日本マイクロソフト社会貢献担当部の楠本恵さんは話す。

認定 NPO 法人「育て上げネット」（東京）が若者を対象とした IT 講座を開くにあたり、社員ボランティアを IT 講座の講師として派遣するのではなく、NPO 職員が IT 講座の講師となるためのトレーニングを、社員ボランティアが実施した。NPO の職員ら自身が講師として支援するノウハウが組織に残れば、持続的な活動につながるからだ。

「社員ボランティアには、自分のスキルを社会に還元することを求めています」と楠本さん。社員の経験やスキルを地域社会におすそ分けしていく「社会的エコシステム」を作り上げていくことは、技術人材のボランティアを一過性のものとせず、継続的に地域社会に還元できる仕組みを作ることでもある。

結果として、社員自身の成長にもつながる。テクノロジーを巡って世界的に大きな構造転換を迎えている現在、時代の要請にもかなっている。

テクノロジーは、ツールである。テクノロジーを真の意味で社会に活かすためには、人間の介在が欠かせないのだ。



プログラミング教室に参加する真剣な面持ちの女の子。参加者の半数は女子だ



社員ボランティア（右、左）と一緒にプログラミングに挑戦



社員ボランティアとして出前授業に数多く参加する松原さん（右）

© 2019 Microsoft Corporation. All rights reserved. ●本紙は情報提供のみを目的としており、本紙の内容について、Microsoft は、明示的あるいは非明示的いかなる保証もいたしません。●その他、記載されている会社名、ロゴおよび製品名は、各社の登録商標または商標です。●本紙に記載した情報は、将来予告なく変更されることがあります。●本内容は、2018年7月現在のものです。